

見えざるユダヤ人

イスラエルの〈東洋〉

白杵 陽 著

平凡社 一九九八年
本体 二、二〇〇円

評者

稲賀繁美

(共同研究員)

白杵陽という研究者の存在を知ったのは、ひとつの衝撃だった。アラビア語ヘブライ語をきちんとこなし、日本ではまったく手付かずに等しかったパレスティナ／イスラエル現代史研究の成果を、英語でも自在に活字にする能力の持ち主。今から二〇年前に板垣雄三氏がしきりと嘆いておられた、この国の伝統的な歴史研究のゆゆしき盲点を補う適任者が、ここによりやく現れた、と心強く思ったのは、今から数年前。そして、それからの白杵氏の活躍には、まことに目覚ましいものがある。その一端が今回よりやく、一般の読者にも容易に入手できるかたちでまとめられた。鶴飼哲氏の『抵

抗への招待』、『償いのアルケオロジ』、鈴木規夫氏の『日本人にとってイスラームとは何か』、新原道信氏の『ホモ・モーベンス』など、イスラーム・地中海世界研究でも、五〇年代後半に生を受けた世代がどうやら活動の盛期を迎えつつある様で、続々と生み出される成果を咀嚼するには、専門領域を異にする人間には、あまりに持ち時間が足らず、クロノスを恨むことしきり。より適任の幾多の専門家を差し置いて本書の評者を務めるなど、本来は噴飯ものだが、まったく偶然にも隣席同士で乗り合わせた東京への新幹線車内でその見本刷りを手づから頂戴し、翌日アムステルダムに飛ぶ機内で

拝読するという特権的な経験をさせて戴いた手前、門外漢なりに、著者への感謝と注文とを綴ってみたい。機会を設けてくださった本誌編集部にも、まず一言御礼申し上げます。

一
思い出話から始めるのも恐縮ながら、本書第六章「バイリンガル・ハイファ」は拙訳でフランスの読者に提供する機会を得た事の始めは旧友のチュニジアの作家、アブデルワッハブ・メッデブが、自ら創刊した国際雑誌『デダル』でイエルサレム特集号を企画し、当方に日本人のイエルサレム紀行で何か適当なものはないか、と打診してきたにある。徳富蘆花から遠藤周作、小川国夫ほかに至る、何人かの文章を読み直してみたが、いずれもあまりに時代がつき過ぎており、改めて読むと（小川氏は別としても）信じられないほどに紋切り型の、アラブ人蔑視といわざるを得ない救い難い偏見に満ちあふれていて、到底提案できる代

物ではなかった。本来ならば日本でエドワード・W・サイードの活動と「ほぼ軌を一にしてきた」(本書一八七頁)板垣雄三氏の先駆的な業績(『石の叫びに耳を澄ます』にまとめられている)から、一文を選びたいとも念じた。だが、サイードの著作なら、未邦訳の *The Politics of Disposition* 同様、時事的発言の集成たる本書からは、残念ながらメッデブの今回の企画に当てはまるようなテキストを抽出することができず、板垣氏の存在を——北アフリカからイランに至る——フランス語圏インテリにアピールするせつかくの機会なのに、と臍を噛んでいた。

そんなおりに、ふと目にした『みすず』に掲載されていたのが、臼杵氏の一文だった。普段のいかにも日本の歴史学会仕込みといった、時に晦渋かつ頓誨あるこちたき論文調とはまるで別人のような、それは伸びやかな筆致で、テル・アヴィヴからハイファに至るバス車内の情景が活写されている。休暇から任地にもどる車中で銃を膝に

眼り込む少年兵や、キリル文字の読書にふける、最近のロシアからの移民らしい婦人の佇まい。そんな細部を的確に浮き彫りにする観察の裏には、イスラエル社会の現在への、著者の類い希な眼差しがしかと透視され、あたりの情景は、まるで映画でも見るような鮮やかさで、本題へと吸い込まれてゆく。これだ、といった直観的な確信とともに、門外漢の蛮勇とでもいうのか、熱中して一晩で仏訳してしまったのも、思い返してなつかしい記憶である(*Déjà* No.34, 1996掲載)。

ちなみにもう四〇〇号を越えたという『みすず』掲載の論文で、エドワード・サイードの論文を始め、あれだけの量と質の外国語論文が和訳されながら、その反対に同誌掲載の和文が横文字になったのは、なんと今回が初めてとのこと。いささか山崎正和の発言だが、敗戦後五〇年間に及ぶこの国の文化輸入超過と発言下手とが、いかに病的な状況を呈していたかを期せずして知らされて愕然としたことも、せつかくの機会

だから書き付けておこう。そしてこれも蛇足だが、『デダル』誌の一二号には、サルマン・ラシュデイの『悪魔の詩』の訳者にして、おそらくはそれゆゑに殺害されたが迷宮入りの運命を辿った五十嵐^{ひとし}一の人と学問を分析した拙文(これにはラシュデイ本人からも反応があった)、また五一六号の『ポスト・コロニアリズム』特集には、エドゥアル・グリッサンなどカリブ・クレオール^{クレオール}の騎手や亡命イラン人ダリユーシ・シャエガン、フアン・ゴイティソローなど、今日の世界でもっとも鮮烈な航跡を描いている知的闘士たちに立ち交じり、西谷修、鵜飼哲の両氏も寄稿しておられ、国際舞台における日本国籍所有知識人たちの、最低限の責務分担に貢献しておられることも付記しておきたい。いうまでもなく、臼杵氏の業績も、こうした責任感ある発言に伍して、この国の国内市場消費を越えた次元で評価されるだけの射程を、十二分に秘めている。

二

本書の功績は多々あるが、まず第一に指摘すべきは、ユダヤ人にもいろいろある、といういわば当然な認識を、イスラエル社会のかかえる歴史的かつ今日的な具体的問題に即して、現場に参画した有能なる観察者ならではの目でもって縦横に解析していることだろう。欧米系ユダヤ人たるアシュケナジーム、元来はスペインから追放されたユダヤ人の末裔を意味するスファラディーム、さらには場合によってはスファラディームと混同される「東方出身」のミズラヒーム。そうした出身地の違いが、イスラエルのユダヤ人社会内部での階層格差とユダヤ人同士での南北問題とも言うべきエスニツ

ク対立を形作っている。そこにさらにはアラビア語を母語としてきたイラク系のユダヤ人とか、逆にヘブライ語をも母国語として育ったアラブ人イスラエル国籍取得者といった複雑な存在が錯綜する。現代イスラエル社会のそうした基礎的事実ひとつ、マスコミによってカヴァー（報道／隠蔽）された情報からは、容易には伝わってこないイスラエル国有航空が安息日にも飛行業務をすることに宗教的理由から異議を唱えるハレディーム（超正統派）ならずとも、土曜日にはほぼ完全に機能停止に陥るこの国で、実は（礼拝日の異なる）アラブ人たちが、安息日の日常を裏で支えている、といった仕組みすら、現地を知らない者には見え

見えざるユダヤ人

中イスラエルの 著者 中

白桦 陽

Invisible Jews

Chosen in Israel by Akira Iwano



1983

白桦 陽

'87'56年

共著書

現在

大分県生まれ
東京大学大学院国際関係論博士課程単位取得
在ヨルダン日本大使館専門調査員、佐賀大学講師、同助教授、エルサレム・ヘブライ大学トルーマン平和研究所およびベン・ツヴィ研究所客員研究員を経て
国立民族学博物館地域研究企画交流センター助教授
『イスラム原理主義』とは何か』など

てこない。ましてや、社会主義思想を背景とした労働シオニズムが、ハレディームのユダヤ主義とは実は真つ向か対立している、といった基本的認識すら、日本という環境にあつては、ほぼまったく理解の彼方に止まっている。

イスラエル・ユダヤ人社会の底辺に位置するモロッコ系移民のもたらしたミムナーの祭りの民族学的／政治学的読解。また一九五〇年のイラクでのユダヤ人国籍剥奪法施行にともないイスラエルに移住した一〇万人を超えるイラク系ユダヤ人のひとりだった移民少年が、キブツで西欧的価値観に直面して感じた疎外感を作品化したエリー・アミールの小説『燔祭の鶏』。これらを枕に、「見えざるユダヤ人」として抹消されてきたに等しい東方ユダヤ人（ミズラヒーム）の存在を照射する考察。さらに民族としてのユダヤ人と信仰集団としてのユダヤ教徒との違いの背景として、イスラーム社会で庇護の対象だった「啓典の民」たるユダヤ教徒と、ヨーロッパ起源の反セム主義により

「人種」として差別されたユダヤ人（「シオニスト」と、という把握のずれを透視する議論。そしてこうした土俵のうえで、例えば一九世紀末のイエメン系の第一次ユダヤ人移民の存在そのものが——その資本主義的人植のためか——、従来の社会主義的労働シオニズム政権下では事実上黙殺されてきたのに、一九七七年にリクードが政権をとり民営化路線に転換するや、再認識の対象として浮上した例など、イシュューヴ（パレスティナでのユダヤ人社会）形成史の歴史記述をめぐる闘争そのものの背後に潜むメカニズムが解き明かされる。

三

このように第一部では、もとより単線の年譜による一國史記述には収まらない移民国家形成過程の複雑な経緯が高密度で提示される（時にはやや圧縮しすぎで一読では事態を掴みかねない箇所もあるが）。第二部ではいわばこの舞台のうえで、より具体的なケースを介して、パレスティナ／イスラ

エル二重構造社会が抱える痛みが抉出されてゆく。アラブ・ヘブライ二言語状況の狭間で表現を模索するサミー・ミハエル、エミール・ハビービーといった作家たち。結婚が各々の宗教ごとの宗教裁判所の管轄であるため、異なった宗教間の婚礼が国内では不可能な状況下で、そうした「離婚」からイスラエルに生まれ落ちた子供の帰属問題。イスラエル国家成立と裏腹に土地を奪われた先住民棄民としてのパレスティナ難民問題と、その陰に見落とされるヘブライ語を母国語としてイスラエル国籍を持つアラブ人、あるいはアラブ系イスラエル人。パレスティナ・アラブの出自とイスラエル国籍と市民権との、自己矛盾に満ちたアイデンティティー危機。ユダヤ人の言葉であると同時にイスラエル国家の公用語でもあるヘブライ語の二重性。矛盾を解決すべく論理を手繰つても、その末に見えてくるのは、ユダヤ人性の拒絶としてのイスラエル市民権、という倒錯でしかありえない……。こうした運命に翻弄される人々の突き詰

めた群像。とりわけ初出時に一読して感心したのは、まず、こうした泥沼のような錯綜と軋轢を明快に整理できる著者ならではの卓越した、エドワード・W・サイード論『W』の背後に潜むワディ／ウイリアムの二重性には、在エジプト「買弁」商人から北米合州国市民へと変身し、やがて埋葬されるべき故郷からも拒絶される彼の父の「よそ者性」が凝縮される。また、仮に実際パレスティナ国家が建設されれば——イスラエル建国によって作り出されたあの難民としての——パレスティナ人も消滅する道理だとして、離散と亡命への覚悟を語るファワーズ・トゥルキの痛切な言葉。悲願の実現が幻滅と裏腹なこの極限状況は、生地アレクサンドリアを去って祖国であるはずのイスラエルに「戻り」ながら、地中海メトロポリスへの憧憬を語って止まぬ、ジャック・クリン・カハノフ（一九一七—一九七九）、エジプトから追放されてパリに共產主義者として客死した、アンリ・クリエル（一九一四—一九七八）の肖像へと語り継がれる。

そんな矢先、著者は旅先のアムステルダムで、一九九五年一月四日、イツハク・ラビン首相暗殺の報に接する。

当初はイスラーム『過激派』の犯行かとも懸念された暗殺の実行犯は、実はイガール・アミールというイエメン系ユダヤ教徒の青年だった。平和に殉じた戦士の死を悼む欧米諸国と、敵方の首相兼国防相の死を歓喜をもって迎えるアラブ側との落差を演出するCNN報道。それをしかと見極めたうえで、著者はあくまで冷徹に指摘する。

ユダヤ宗教法〔ハラハー〕の名において、イスラエル国家の首相を裏切り者〔モセー〕として死刑執行するような『敬虔』なユダヤ教徒が、イエメン出身者の、しかもパール・イラーン大学という正統ユダヤ教高等教育の牙城の出身者から出たことを。

イスラエル国内でも声高には触れることがタブーに等しいというこの事実に含まれる、神学的、政治的な意義。そして暗殺実行者の出自がイスラエルの国内報道では極力伏せられたことの意味。戦慄すべきことだが、

あたかもエピソードを占めるこの事件の意味を読み解く鍵を前もって読者に提示するために、本書の先立つすべての章が綴られていたのではなかったのか、との印象すら評者は抱く。

だがパレスティナ／イスラエルを巡る、時に徒労感を禁じ得ない事態の停滞／展開は、その後も休むことを知らない。『パレスティナ選挙後のイスラーム諸組織の動向調査』（社団法人イスラーム協会、一九九六年三月）ほか、著者を含む研究者たちは休むまもない対応を強いられている。問題の苛酷さが時に神経症的な危機をも呼ぶ環境にあつて、緊張感の持続のなかにもご自愛とさらなるご健筆を願ってやまない。

（国際日本文化研究センター助教授・
総合研究大学院大学助教授）



コーヒー・ポット



編集後記

北陸・東北地方はついに今年は梅雨明け宣言もなく、このまま秋を迎えるかもしれないという冷夏だそうですが、蟬の声がこれでもかとふりそそぐ中、万博公園を歩いてくると毎年のことながら、ああ、夏だなあ、と実感します。

遅い梅雨明けとほとんど同時に「大モンゴル展」がオープンしました。夏休みということもあってたくさんの人々で連日にぎわっているようです。友人たちが遊びに来た機会を利用してさっそく出かけてきました。折りよく開催されていたミニコンサートでホーミーを堪能し、五感を駆使して展示を楽しみました。レストランのモンゴル料理も試してみました。猛烈に忙しかった夏、ようやく一息入れた一日でした。

今年度初めて出版委員になり、初めて『民博通信』を担当しました。……なるほど、『通信』はこうしてできていくんだ、と納得することしきり、とはいえ右も左もわからぬ

うちに、着々と編集作業はルーティーンにのっとって進行していくようで、私は今号担当者としてしかるべく貢献したのかどうか、実ははなはだおぼつかなく思っています（期待された原稿も取れなかったし……）。こうして編集後記を書くのは何だかバツの悪いような気がしていますが、それは、ひとつには私が地域研に所属しているということにも理由があって、時折ともすれば館内アイデンティティ・クライシスにみまわれることもあるのが正直なところですから。ちょうど『通信』部会では、地域研についての情報も積極的に掲載してはどうか、という意見が出されたところでもあり、今後『通信』誌上にも地域研の「居場所」ができていくことになるでしょう。

さて、ともあれ、こうして編集後記も書いたことだし、この厳しい残暑から脱出し、そろそろ秋の涼しい風が吹いているであろう中央アジアへ出かけます。今頃はハミウリが格別おいしいでしょう……。

（帯谷知可）

「民博通信」編集委員

朝倉 敏夫（編集長）	
上杉 富之	帯谷 知可
岸上 伸啓	齋藤 晃
塚田 誠之	野林 厚志
榊屋 友子	山本 紀夫

民博通信 第八二号

平成一〇年一〇月二六日発行 非売品

編集・発行 国立民族学博物館

〒565 8511 大阪府吹田市千里万博公園一〇一

電話（06）八七六―二一五一（代表）

印刷 中西印刷株式会社